

フクロウの
オーウェルじいさんの

クリスマスの はなし お話

フィン^けは、毛が ふかふかの 灰色^{はいいろ}の リスです。
がっしりした 大きな カシ^きの 木の みきの
真^まん中の、こじんまりとした 穴^{あな}に、家族と
いっしょに 住^すんでいます。今は 冬^{ふゆ}。はだかの
木の 枝^{えだ}には、霜^{しも}が 張り付^はいています。

お日^ひ様が 地^ち平^{へい}線^{せん}の 向^むこ^う側^{がわ}から 顔^{かお}
出^だすと、フィン^とは すぐさま ベッドから 飛び
出^だしました。フィンは ママの ところへ 行^いって
リス・ハグ^{うで}をし（腕^{うで}だけじゃ なくて、やわらかい
しっぽも 回^{まわ}して）、おいしい 朝食^{ちようしょく}を 食^たべる
ために すわりました。今日は フィンにと^{きよう}って、
すぐ^{とく} 特別^{べつ}な 日^ひ。クリスマス休^{やす}みの 最初^{さいしよ}の
日^ひなのです。



フィン^{ちようしよく}は朝食^おを終え^きると、木の枝^{えだ}から
枝^{えだ}へかけぬけようと、巣^すを飛び出^とさん
ばかりでした。その時^{とき}です。お母^{かあ}さんが
フィン^とをよび止^とめる声^{こえ}がしました。

「そんなにあわてないで、フィン。いくつか、
しわすれたことがあるんじやない？」

「う〜ん。だけどママ、もうクリスマス休^{やす}み
だもの。」

「それは関係^{かんけい}ないわ。休^{やす}みでも、歯^は
みがなくちゃいけないし、ベッドもきちんと
直^{なお}さないと。部屋^{へや}も片付^{かたづ}けなくちゃね。」と、
お母^{かあ}さんが言^いいました。

「はい、ママ。」とフィン。そう返^{へん}事^じは
したものの、心^{こころ}の中^{なか}では、何^{なん}でこんなこと
しなくちゃいけないんだろうと思^{おも}いました。
クリスマスにできる、たくさん^{たの}の楽しいことや
遊^{あそ}びがあると^{いうのに}…。

フィン^{ざつよう}は、雑用^{ざつよう}をできるだけすばやく
片付^{かたづ}けると、全速^{ぜんそく}力^{りき}で近^{ちか}くの木^きに
かけ上がり、枝^{えだ}から枝^{えだ}へと飛^とび移^{うつ}りました。
親友^{しんゆう}のディリー^あに会^いいに^{行くところ}
なのです。ディリーは白ウサギ^{しろうさぎ}で、家族^{かぞく}と
いっしょに穴^{あな}に^す住^すんでいます。



「ディリー、出ておいでよ。いっしょに
あそ 遊ぼう！」フィンが よびました。

すると、ふきげんな 顔を した ディリーが
で 出てきました。「ちょっと 待ってよ。休みの
日だって、片付けとか、まだ しなくちゃ
いけない ことが あるんだから。」

フィン、ディリー一家の 穴の 外で
ま 待っていました。ディリーが 雑用を 終えて
で 出ると、二人は そそくさと 遊びに
で 出かけました。

フィン、木に 登って 枝から 枝へと
と 飛び移る ことが できますが、ディリーは
ものすごく 速く はねる ことが できるので、
フィン、ディリーに 追い付くので
せいいっぱいです。

朝の 時間が 過ぎて 午後になるころには、
ふたり 二人は オーウェルじいさんの 木の
そばに 来ていました。オーウェルじいさんは、
とし と 年を取った 賢い フクロウです。
オーウェルじいさんは 長いこと 生きてきて、
いつも おもしろい お話を してくれました。
オーウェルじいさんは、小さな 動物たちが
だい す 大好きです。フィンと ディリーが 来たのを見
て、喜んでくれました。



「さてさて、^{きみ}君たち ^{ふたり}二人は、^{さい きん なに}最近 ^{なに}何を
しとるのかね？」オーウェルじいさんが
^き聞きました。

「^{ふゆ やす}冬休みなの！ だから、たくさん ^{あそ}遊んで、
^{たの}楽しんでるのよ！」^{こた}ディリーが 答えました。

「でも、ぼくたちの ^{かあ}お母さんは、^{ふゆ やす}冬休みでも
^{ざつ よう}雑用は しなくちゃ いけないって ^い言うんだ。」
フィンが ^{つ ぐわ}付け加えました。

「^{やす}ああ、クリスマス休みのう！ ホントに
すばらしいのう。わしも ^{ちい}小さかった ^{とき}時は、
^{やす}休みの ^ひ日に ^{ざつ よう}雑用をするのは イヤじゃった。
だがな、ある ^{ふゆ}冬のことじゃ。わしと わしの
^{にい}兄さんは、どうして ^{かあ}母さんの ^い言いつけを
^{まも}守るのが ^{たい せつ}大切なのか、^{こん なん ほう ほう}困難な 方法で
^{まな}学んだのじゃ。その ^{はなし き}話を 聞きたいかの？」

「聞きたいです！」フィンと ディリーが
^{こえ}声を ^{こた}そろえて 答えました。二人は、
オーウェルじいさんの ^{はなし}お話が
^{だい す}大好きなのです。

^{とし と}年取った フクロウは ^{した}下に まい降りてきて、
そばの ^{いわ}岩に とまりました。フィンと ディリーは、
オーウェルじいさんの ^{はなし き}お話を 聞こうと、
わくわくしながら ^{じ めん}地面に すわりました。



「わしが ほんの ちっぽけな ひよっこだった
とき
時の ことじゃ。」 オーウェルじいさんが
はな はじ
話し始めました。「わたしの 母さんは、
どこかに 行く 用事が あって、 何日か 家を
るすに しなくてはいけなかった。

兄さんの エドガーと わしは、もう 自分
じ ぶん
のことは できるくらい 大きくなっていた。
おお
母さんは、るすの 間に わしたちが 毎日
かあ あいだ まい にち
しなくてはいけない ことを 説明してから
せつ めい
で 出かけて行った。夜には えさを 取るための
と
力があるように、昼には ちゃんと ねるよう
ちから ひる
にとか、巣の 中は いつも きれいに しておく
す なか
ように、などだ。」

「本当？ 冬休みなのに、そんな こと
ほん とう ふゆ やす
しなくちゃ いけなかったの？」 デイリーが
き
聞きました。

「そうじゃ。それが 母さんの 言いつけ
かあ い
じゃったからな。だが、母さんが いなくなると
かあ
すぐに、エドガーと わしは、ほかの ことを
い
しようと 言った。

『母さん、行っちゃったね。』と エドガーが
かあ い
言った。『母さんが 帰ってくるまで、好き
い かあ かえ す
放題に しようぜ。』
ほう だい



『1日中、遊んでいよう!』わしも
賛成した。『昼ねも しなくて いいし、雑用も
しなくて いいよね。』

それは 楽しそうな 計画に 思えた。

それで、わたしたちは 森の 中で かくれんぼを
し始めた。1日中 遊んで、思うぞんぶん、
楽しんだのじゃ。だが、夜が 来ると、わたしたちは
非常に お腹が すいてきた。それで、母さんが
教えてくれたように、えさを さがしに 行った。
だがな、わたしたちは 二人とも 遊びつかれていて、
すばやく 動けずに、結局 えさは 何にも
とれなかったんじゃ。

わたしたちは、ついに ねるために 巣に もどって
きた。だが、巣の 中は めちゃくちゃに
散らかっていて、ねるどころでは なかったのじゃ。
いろんな ものが ごろごろしていて、ねごこちが
悪くてな! ひとばんじゅう、あっちに 向いたり、
こっちに 向いたり しながら、朝が 来た 時には、
もう くたくたじゃった。それに、お腹も ペコペコ
じゃったしな。だが、日中は 狩りは できんから、
夜まで 待たねばならなかった。



それでも、わたちは 巣を きれいに は
しなかった。その 代わりに、また 遊びに
で 出かけてしまったのじゃ。そして、またもや
1 日中、遊びほうけてしまった。その 夜も
また、わたちは つかれ過ぎて、狩りどころでは
なかった。だから、そのまま ねようと した。

お腹が グーグー 鳴るのを がまんしながら、
あっち向き こっち向きして 転げ回った
あげくの 末、エドガーと わしは、ついに、もし
わたちが 母さんの 言いつけを 守って
いたなら、こんなに つかれて お腹を
すかす ことも なかっただろう ことに 気が
ついたんじゃ。母さんが 言った ことに
従っていれば、わたちの 巣は きれいで
いごちよく、ぐっすり ねむれたんじゃとな。

『ぼくたち、巣を きれいに しなくちゃ
いけないんだと 思うよ。』と、エドガーが 言った。
『これじゃあ、ねむれないもの。とがった ものが
ごろごろして、チクチクするんだ。』

『うん、そうだね。』 わしも 言った。『それに、
昼ねも するべきだったんだよ。そうすれば、
狩りの 時に そんなに つかれていなくて
すむもの。』



それで、エドガーと わしは 巣を そうじし、
その後は、幸せな 気持ちで ねむったのじゃ。
きちんと 片付いた 巣で ねむるのは、とても
気持ちの いいものじゃった。そして 日中も、
ずっと 休むようにした。夜が 来た 時に、
つかれて 狩りが できないなんて ことが
ないようにな。そして その夜は、ついに
おいしい えさに ありつく ことが できたのじゃ。

母さんが もどってきた 時、わしたちは 何が
起こったかを 母さんに 話した。母さんは、
わしたちが 教訓を 学んだと 聞いて、喜んで
くれた。わしたちは 母さんに、これからは
母さんの 言いつけを ちゃんと 守れるように
がんばると 約束した。

わかるかいの？ 遊んで 楽しむのは いいが、
部屋を そうじしたり 雑用を するのにも、
良い 理由が あるのだという ことを、わしたちは
学んだのじゃ。母さんを 感謝し、母さんが
教えてくれる こと すべてを 感謝する ことを
学んでからは、わしたちは、雑用や 巣の 中の
そうじなんかを する 時は、いつでも 喜んで
できるように がんばったのじゃ。」



ディリーと フィンは、おたがいに 顔を
み あ
見合わせ、そして オーウェルじいさんを
み
見ました。それから、二人とも、家の
し こと よろこ て つだ
仕事を 喜んで 手伝うよう になりました。
た と え クリスマス休みの あいだ
間でも、です。

「オーウェルじいさん、お話を してくれて、
ありがとう。」 フィンが お礼を 言いました。
「これからは、雑用を する 気分 で ない
とき は いつも、この お話を 思い出すように
します。」

「どう いたしまして。」 オーウェルじいさんが
い たの
言いました。「楽しい クリスマス休みを！」

「オーウェルじいさんもね！」 ディリーと
フィンも、声を 合わせて 言いました。
ふたり と
二人の 友だちは、これからは がんばるぞと
けっ しん
決心して、それぞれの おうちへ 帰って
い
行きました。



寄稿：デヴォン・T・ソマーズ、原作者：不明

絵：ディディエ・マーティン デザイン：クリスティア・コーブランド

出版：マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2011年、ファミリーインターナショナル

“Mr. Orwell’s Christmas Tale”--Japanese

[http://www.mywonderstudio.com/0-5/2011/12/19/mr-](http://www.mywonderstudio.com/0-5/2011/12/19/mr-orwells-christmas-tale.html)

[orwells-christmas-tale.html](http://www.mywonderstudio.com/0-5/2011/12/19/mr-orwells-christmas-tale.html)